

子ざると母ざる

母が子供に読んできかせてやる童話

小川未明

青空文庫

ある日、かりゆうどが山へいくと、子ぎるが木の實を拾った
 べていました。もうじきに冬がくるので、木の葉は紅く色づいて、
 いろいろの小鳥たちが、チツ、チツ、といつて鳴いていました。
 かりゆうどは、子ぎるを見つけると、足音をたてぬように、
 近寄りました。

「はてな、子ぎるひとりとみえるな。親ぎるはどうしたろう？」
 あたりを見まわしたけれど、母ぎるの姿が見えませんでした。
 「きつと子ぎるめが、母ぎるの知らぬまに、遊びに出たのだ。鉄
 砲で打つのは、かわいそうだ。どれ、つかまえてやろう。」
 かりゆうどは、腰につけていた、つなで、おとしを造りました。

そして、自分じぶんは、その端はしをにぎって、木きの蔭かげに隠かくれていました。

それとも知らしずに子こざるは、木きの実みをさがすのに夢むちゆう中ちゆうになつていました。そのうちおとしの中なかへ入はいつて、はつと思おもうまに、子こざるは、かりゆうどの手てに捕とらえられてしまいました。

かりゆうどは、村むらへ歸かえると、子こざるを家いえの前まえの木きにつないでおきました。すこし馴ならして、町まちへ売うりにいこうと思おもつたのです。

村むらの子供こどもたちは、見物けんぶつにきて、芋いもを投なげてやったり、かきを投なげてやったりしました。子こざるは、上じやうず手にそれを受うけて、食たべていました。山やまの林はやしで、拾ひろつてたべた木きの実みのようにおいしくありませんでした。寒さむい西にし風かぜが吹ふいて、木きの枝えだが動うごくを見みると、山やまのお家うちが恋こいしくなるのでした。

「お家へ帰りたいな。ひとりでは、道がわからないし、自分の力では、腰についている鏈を切ることができない。」

子ぎるの目からは、熱い涙がわきました。

そこへ、つえをついて、白いひげのはえた、おじいさんがきました。

「孫たちがほしがるので、この子ぎるを、私に売ってくださいらな
いか。」といいました。

「おお、酒屋のご隠居さんですか。あなたが、このさるを買つ
てくだされば、私は、町へ持つていく骨おりなしにすみませう。」
と、かりゆうどは、答えました。

子ぎるは、こうして、その日から、酒屋の正ちゃんや、かね子

さんの遊び相手となつたのです。

かね子さんこも、正ちゃんしょうも、どちらも欲張りよくばでした。

「このおさるは、僕ぼくのだよ。」と、正ちゃんしょうがいうと、

「いいえ、このおさるさんは、私わたしのよ。」と、かね子さんこがいいました。

「ちがうよ、僕ぼくのだから。」

二人ふたりは、たがいにいい争あらそつて、祖父おじいさんのところへききにきま
した。

祖父おじいさんは、ただ笑わらつて、返事へんじにお困こまりになりました。

「さあ、だれのだろうな。それは、おさるさんにきいてみるのが、
いちばんいい。」と、祖父おじいさんは、おっしやいました。二人ふたりは、

こんどは、子ぎるのところへまいりました。

「おさるさん、僕のだねえ。」と、正ちゃんしょうちゃんが、いいました。

「おさるさん、私のわたしだわねえ。」と、かね子かねこさんが、いいました。りこうりこうな子ぎるも、やはり返事へんじに困こまって、しばらく頭あたまをかしげて考かんがえていました。

「私わたしは、私わたしをいちばんかわいがってください方かたのものになります。」と、答こたえたのです。

正ちゃんしょうちゃんにも、かね子かねこさんにも、子ぎるの返事へんじが、わかつたでしようか？

山やまでは、母ははぎるが、かりゆうどにつれられていった日ひから、夜よるも昼ひるも子ぎるのことを思おもって忘わすれる日ひがありませんでした。

「いまごろはどうしているだろう。あれほど、遠くへひとりで遊あそびにいつてはならぬといったのに、いうことをきかないばかりにこんなことになってしまった。達たっしや者でいてくれるだろうか。」

と、里さとの方ほうを見て心み配しんぱいしていました。

思おもいがけなく、山やまのからすが、母ははぎるのそばへ飛とんできて、

「ご心配しんぱいなさいますな、子こぎるさんは、お達たっしや者で、かわいがられていますよ。」と、自じ分ぶんのみ見てきたことを話はなしてくれました。

母ははぎるは、それをきくと、どんなに喜よろこんだでありますよ。幾いく

たびもしんせつなからすに向むかって、お礼れいをいいました。そのう

ちに雪ゆきが降ふりはじめました。山やまも、野原のほらも、真まつ白しろになりました。

山やまのからすから、子こぎるのいるところを聞きいた母ははぎるは、ある

晩山ばんやまを下くだつて、雪ゆきの野原のほらを歩あるいて、子こぎるのところへたずねてま
いりました。

それは、寒さむい晩ばんで、子こぎるは、箱はこの中なかのわらにうずまつて、眠ねむ
つていました。すると、だれか起おこすものがあります。驚おどろいて、
目めをさますと、いままで夢ゆめで見みていた、なつかしい母ははおや親おとろが、顔かお
の上うえからのぞいでいるのでありました。

「お母かあさん！」

「しつ、しづかに、いま、おまえをしぼつてある鏈くさりを切きつてやる
よ。」

母ははぎるは、指ゆびのつま先さきからも、唇くちびるからも血ちを出だして、とうとう
堅かたくい鏈くさりを切きつてしまいました。そして、ふたりは、たがいに抱だき

あ合つて喜び、ころげるようにして、雪ゆきの中なかを山やまの方ほうへと逃にげていくのでした。

雪ゆきの上うえには、二ひきのさるの足跡あしあとと、ところどころに落おちた赤あかい血ちのあとが残のこっていました。が、神かみさまは、この親おやこ子こをかわいそうに思おもわれて、かりゆうどの追おいかけてこぬようと、夜明よあけ方かたから、ひどい吹雪ふぶきとなさいました。それで、なにもかも真まつ白しろになつて、あとがわからなくなつてしまいました。

正しょうちゃんちゆうと、かね子こさんは、朝あさ、起おきてみて、子こざるがいなくなつたので、どんなにびつくりしたでしょう。けれどお山やまへ帰かえつたと知しつたら、「それは、よかつた。」といつて、きつと、喜よろこんでくれたにちがいありません。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「愛育 2巻11号」

1936（昭和11）年1月

※表題は底本では、「子《こ》ぎると母《はは》ぎる」となっています。

※副題は底本では、「母《はは》が子供《こども》に読《よ》ん
できかせてやる童話《どうわ》」となっております。

※初出時の表題は「小猿と母猿」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子ざると母ざる

母が子供に読んできかせてやる童話

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 小川未明

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>